訓練

津守　真

K子は大人に抱かれて、こちらの部屋からあちらの部屋へと歩いてゆかせる。静かな場所にゆきたがることもあるし、皆が遊んでいる傍にゆくこともあるが、私は折があれば皆が遊んでいる場所に誘いたいと思っていた。ある日、母親が迎えにきていた帰り際、トランポリンにつかまって立っていたK子が、急に発作を起こした。急いで傍にゆき支えているうちにK子は眠った。そのわきで母親が遠慮がちに言うのには、あのとき元気の良い子が二人つかみ合いをして大声をあげており、周囲は子どもたちの激しい動きや声にざわめいていた、この子は賑やかな場所が苦手なのですと。この日、K子が急に発作を起こしたのも、その騒音のためではないかと思うとのことだった。私は、K子が大人に抱かれて二

人きりになれる場所を好むことには気付いていたが、自分の本来の静かな動きが妨げられたときに、それが発作の引き金になる程だとは思っていなかった。その次の朝から、私共はK子を穏やかな気持ちで迎え、心も動作も静かに一日を進めるように心がけた。そうすると、この子のどこまでも穏やかな生活感覚がこちらに伝わってくる。そんな経過の後には、K子の方から賑やかな空間を選んでゆくこともあって、そのようなときには発作を起こさない。子どもの本来の生命的な動きを察知しつつ関係を作ってゆくことによって、新たな活動の場が生み出されることを知ることができた。

その頃、何人かの方から、歩行、食事、排泄、言語等の分野で、子どもが嫌がっても、必要な訓練をしないと、能力が伸びないのではないかとの質問を受けた。私はいつもそういう質問になかなかうまく答えられない。

こんなことを考えていたとき、Mくんの食事の場面に出会った。その子はこれまで手を使うことがほとんどなかったのだが、いま、食物を両手でつかみ、顔や手に一杯ごはんをつけて食べている。手を口にもってゆくのも的確でなかったのだが、こうして食べているときには何割かは着実に口の中に入っている。また、片方の手で弁当箱のへりをつかみ、もう一方の手で中味を出したり、弁当箱の内側をなでまわしている。容器には内部と外部があることを触覚で学んでいるのである。

私は、いつかこの子が自分の手で食物を口に持ってゆく日がくることを待ち望んでいた。しかし、その時がくる前に、食事の部分だけを取り出して訓練の時間を設ける必要はないと考えていた。プライドの高いこの子は、その時期には、大威張りで大人から食べさせてもらうことによって、対等な人間関係を経験しているように思えた。そうしているうちに、ある日、この子は自分の手で食物をいじり、口にもってゆくのが面白くなった。その意欲的な姿は目をみはる程で、子どもは自分で必要な時を選んで、集中的に自己訓練をしている。そして、食事と同時に、人間関係も、周囲の状況判断も、あわせて学んでいる。

同じようなことを考えさせられる機会は相次いで起こるものである。

今年の三月に卒業したY子の中学校の先生がこられたとき、その先生が言われるには、Y子は写真を見て状況を理解し行動するのが得意だが、小学校のときにはどのようにして訓練したのかということであった。私ははじめ意味を理解しかねたのであるが、それは私共が順序段階を追って写真教材を提供する訓練を行ったのであろうという前提に立っての質問であった。私はそういう風に考えたことがないことを述べ、写真とY子とのかかわりを話した。

私の机のひき出しには、いろいろの写真が入っている。Y子は三、四年生のころから、

自分の知っている子どもの写真をとり出し、それをじっと眺め、何度もさわり、しまいにはなめたりしていた。そのうちに写真は破れてばらばらになるのだが、私は毎日ひき出しに写真をいれておいた。何か月もそれはつづいた。私だけでなく、他の職員たちも同じように自分のひき出しにわざわざ写真を入れているようだった。私共の学校では、通知表のかわりに子どもごとに毎学期アルバムを作り、それに担任のコメントをつけるようにしている。どの子もこのアルバムは好きだが、Y子のアルバムは、夏休みや冬休みが明ける頃には原形をとどめない程になるのが常であった。こういう生活の中でY子の写真による状況判断と認識は育っていった。それは私共とY子との間の関係のできごとであって、その結果を目標にした訓練とはちがう。

Y子についてはもうひとつ顕著なことがある。Y子には右手の麻痺があり、右手で摑むことができない。しかし、Y子はやろうと思うときには不自由な右手の甲と口を使って実に上手にやる。きれいな色の小さなビーズに糸に通したり、刺しゅうをしたりする。数年前に整形外科の専門医が来られたときは、Y子の様子を見て、この調子で生活していれば特別な訓練は必要ないと言われたことに私共が励まされもしたのだが。いずれも、訓練という観点から見るならば、子ども自身が自らに課している最も効率のよい訓練と言えよう。子ども自身がその意味を理解し、意欲をもって取り組むときには訓練は意味をもつが、そのことなしに、大人からみて望ましい目標に向かって他律的に訓練することは、そ

の子どもの固有の生命的な動きを妨げることになるだろう。そういうときの子どもの顔には輝きが見られない。

訓練ということを考えるときにも、子どもを対象として取り出すか、あるいは、人間同士の関係としてみるかによって、その実際は大いに異なる。

（愛育養護学校）